〔狐話〕

その一

深沢の「向陽」あるどころ、ホテルあるどこ、あそこの上手のど
ご沢で田圃であったの、今田圃でなぐなったども、あこにもとても
おっかね狐いるかったおな。あこさ人来ればよ、何がだもだやら、
口の大き、まなぐの光って髪のちっとかぶったの出はるし、前さ大
きだ山出はたり、いろんなことして人だましたりしたのやな。おれ
兄だ人だば、あそこで二げりもだまさえでよ、家さ来らえなくて、
なんたらごどしても前さ大っき山出はって、どご登ってもこご道だ
勘定だど思ったて道ねし、なんともかんとも迷って、二時間かそし
て迷ったごどあるのや。したばこっちから人行って、
「おいおい佐吉、佐吉、なにするどごだ。なにしてるけな、そご通
りでねで」
たば、
「あっ、誰それだが。おれなんぼせ道さ登ると思ったて、登らえね。
おれ狐にだまさえだべが」
「こっちゃこい、こっちゃこい」
てその人につれられて家さ来たごどもあるしよ。うんておかねどご
だものあこも。したば今では「向陽」建ったし、あの沢みな田圃な
くなってしまったし、あこにもうんとおかねのいるかったもの。